

研究種目：基盤研究 (S)  
研究期間：2006 ～ 2010  
課題番号：18102004  
研究課題名 (和文) 長崎県北松浦郡鷹島周辺海底に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明  
研究課題名 (英文) Grasping and Analyzing Mongolian-Expedition-Related  
Archaeological Sites and Remains on the Seabed of Takashima  
(Kitamatsuura-county, Nagasaki Prefecture, Japan)  
研究代表者  
池田 栄史 (IKEDA YOSHIFUMI)  
国立大学法人琉球大学・法文学部・教授  
研究者番号 40150627

研究分野:人文学

科研費の分科・細目:史学・考古学

キーワード:元寇、鷹島海底遺跡、水中考古学、海底探査

#### 1. 研究計画の概要

長崎県北松浦郡鷹島周辺海域は元寇の際に、暴風雨を避けて避難した元軍と高麗軍の軍船が遭難した海域として知られる。本研究では鷹島を含む伊万里湾全域において、従来から行なわれていた水中考古学的調査手法に加えて、物理学的手法を用いた海底探査を試みる。その上で、両者の融合を図った新たな元寇研究および水中遺跡調査研究方法の確立を試みる。

#### 2. 研究の進捗状況

本研究では、探査班、考古作業班、海外調査班 (文献史学)、同 (考古) の研究班を設けて、研究の深化を図りつつある。

##### (1) 探査班

平成 20 年度までの音波探査によって、伊万里湾の約 80% について、地形および地質調査を終了し、異常反応の抽出 (概査) を終えた。異常反応に対しては、さらに詳細な探査 (精査) を行なう。この概査と精査については、前年度の概査で検出した異常反応に対して、翌年度に精査を実施するという手順を踏んでいる。

研究着手の段階では、概査で検出した異常反応について、精査では素材や形状、大小の相違をはじめとした反応物の内容の相違を比較的容易に判別できると想定していた。しかし、平成 18・19 年度の精査では、魚礁や海底ケーブルなど、海底に露出した状態にある近年の堆積物の判別は容易にできたものの、堆積層中に埋もれた元寇遺物の具体的な内容の判別は、かなり難しいことが確認された。このため、平成 20 年度の調査を開始するにあたって、海底堆積物の内容が明らかな北海道江差港に沈む旧江戸

幕府軍艦「開陽丸」での探査実験を試みた。この結果、海底に堆積した銅製品ははっきりとした反応を見せるが、木材は極めて限られた周波数の音波にのみ反応することを確認した。

##### (2) 考古作業班

平成 20 年度までの作業によって、平成 13・14 年度鷹島海底遺跡緊急発掘調査出土資料約 3000 点中の約 600 点について、考古学的資料化を終了した。この中で、船材と考えられる木材については、長さや幅の点では個々の変化が激しいものの、厚さの点では現在の約 3cm (ほぼ 1 寸) を単位としたまとまりがあることを明らかにした。このことは船材の準備や加工の際に、約 3cm を単位とする尺度が採用されていたことを示唆する。また、出土遺物中の土製円球状製品については、宮内庁が保有する『蒙古襲来絵詞』に描かれている火薬を詰めた爆発弾である「てつほう」と考えられるが、実測作業を通して、その製作技法を復元した。

海底遺跡および遺物についての水中考古学的調査の実施および調査方法の検討では、物理探査班によっていくつかに類型化された伊万里湾海底の異常反応について、内容物確認試掘調査の方法を検討中である。

##### (3) 海外調査班 (考古)

海外における元寇関連考古資料の調査については、中国と韓国の 2 カ国を中心とした情報の収集を進めるとともに、現地での調査を実施している。まず、韓国では全羅南道木浦市に設けられた国立海洋遺物展示館に収蔵展示されている 14 世紀前半の新安海底遺跡から検出された船舶とその積荷

について、資料調査を行なった。次に、中国では沈没船と壺・甕などの貯蔵容器を中心とする陶器の類例調査を中心に実施した。この中で、沈没船については、福建省泉州市開元寺に保管、展示されている宋代の船舶について観察を行なった。本船舶の場合、船体の舷側を構成する板材の組み合わせが3枚重ねとなる点など、韓国新安船とは若干異なった技法が認められる。これらの船舶構造から得られた知見は、鷹島海底遺跡で検出された船材と考えられる木材片の使用部位を検討する上で、重要な比較材料となる。

#### (4) 海外調査班（文献史学）

海外における文献史学関係の資料調査は韓国高麗時代資料、中国宋・元代資料およびモンゴル文字で書かれた資料の調査を中心に実施している。中でも中国宋・元代資料については、『宋史』、『元史』、『金史』、その他、当時編集された文献に残る元寇関連記事を網羅的に集成しつつある。

#### 3. 現在までの達成度

(1) これまでに実施した伊万里湾および北海道江差港沖開陽丸に関する海底探査成果については、平成20年度末に調査成果をとりまとめ、2冊の報告書を刊行した。

(2) また、平成13・14年度鷹島海底遺跡緊急発掘調査出土資料については、平成20年度までの作業によって、約600点について考古学的資料化を終了し、その分析成果を『松浦市文化財調査報告書』第2集に収録した。

(3) このような経過から、本研究は、②おおむね順調に進展している、と考えている。

#### 4. 今後の研究の推進方策

(1) 万里湾海底面および海底堆積層中の異常反応の中で、海底地表面に露出した状態で検出されている船舶らしき反応の確認を行なう。この際、浅海域については潜水による視認を試み、さらに現地での図面・写真などの資料化作業を行なう。

(2) 水深30mを超えるやや深海域の異常反応については、水中ロボットを用いた確認を行なう。

(3) 海底下の堆積層中に見られる異常反応についてはいくつかを選び、潜水によって現地でのボーリング調査を試みる。これと探査反応との対比を行なうとともに、内容物の素材や形状に対する検討を行なう。その後、必要に応じて、試掘調査を実施し、内容物の確認を行なう。

(4) これらの成果を踏まえ、探査と水中考古学調査が融合したこれからの調査研究システムの構築を試みる。

(5) 元寇に関する考古学的資料、および文献データベースを構築し、これを踏まえた研究報告書を刊行する。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

(1) 佐伯弘次、日本侵攻以後の麗日関係、『蒙古の高麗・日本侵攻と韓日関係』、景仁文化社、ソウル、pp. 260-274、2009、査読なし

(2) 池田榮史、考古学研究者による物理探査の模索、『最新の物理探査適用事例集』、pp. 355-359、社団法人物理探査学会、2008、査読あり

〔学会発表〕(計 2 件)

(1) 日本中世の外交文書と「返牒」、佐伯弘次、九州史学会シンポジウム、九州大学、2007年12月8日 p

(2) 東アジアの交流システム-琉球列島出土中世陶磁器を中心として-、池田榮史、第39回韓国文化人類学回前期学術大会シンポジウム(東アジアの文化交流と疎通)、韓国文化人類学会、韓国全南大学、2007年6月1・2日

〔図書〕(計 6 件)

(1) 池田榮史・根元謙次、「長崎県北松浦郡鷹島周辺海底に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明」(平成18年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究(S)研究成果報告書 第1集)、全146頁、2009

(2) 根元謙次・池田榮史、「北海道江差町開陽丸音波探査報告」(平成18年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究(S)研究成果報告書 第2集)(研究課題

長崎県北松浦郡鷹島周辺海域に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明)、全86頁、2009

(3) 池田榮史「第3章 出土遺物について(4. 金属製品(青銅製品・鉄製品)、5. 漆製品、6. 木製品、8. 船材および木材)」『松浦市鷹島海底遺跡 平成13・14年度鷹島町神崎港改修工事に伴う緊急調査報告書』(松浦市文化財調査報告書 第2集)、pp. 62-129、2008

(4) 佐伯弘次、『日本史リブレット77 対馬と海峡の中世史』、山川出版社、p. 106、2008

(5) 大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎(編)、『中世都市博多を掘る』、海鳥社、p. 255、2008

(6) 佐伯弘次(編)『街道の日本史49 壱岐・対馬と松浦半島』、吉川弘文館、p. 244、2006

〔公開講演〕(計 1 件)

根元謙次「伊万里湾の海底を除いてみよう～3D映像で見る海底の様子」、平成18年7月9日、「海の日」記念講演会「伊万里湾の海底に歴史を探る～海に眠る元寇の跡～」、主催：松浦市教育委員会、特定非営利活動法人 文化財保存支援機構